

もうひとつの俘虜収容所 —久留米とドイツ兵 1914-1920—

はじめに

近年、第一次世界大戦下に日本各地で設立されたドイツ兵俘虜収容所に関する調査・研究が急速に進みつつある。故・富田弘氏の遺著刊行を嚆矢としながら¹、1990年代以降、各自治体編纂の『市史』内での記述や報告書の刊行、「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究会（事務局は鳴門市ドイツ館）による雑誌の刊行²、そして収容所内で発行された俘虜新聞の翻訳・刊行³にいたるまで、実にさまざまな活動が展開されてきた。2008年10月13日には、「日独文化交流史上の在日ドイツ兵捕虜とその収容所」と題する一般公開国際シンポジウムが岡山大学で開催され、これまで各地の俘虜収容所に関する調査・研究活動に携わってきた十数名の研究者が一堂に会し、その成果を報告している⁴。

しかしながら、このように俘虜収容所研究が全国的な展開をみせる一方で、知名度の点ではなお、徳島県の板東俘虜収容所が他の収容所に対し圧倒的優位を誇っている。板東の存在は、俘虜たちの演奏したベートーヴェンの『交響曲第九番 歓喜の歌』、通称「第九」の音色とともに、敵同士でありながら文化交流の火を絶やさなかった日独両国の友好の証として、また、俘虜たちを人道的に扱い、彼らの積極性を存分に引き出した所長・松江豊寿中佐の人間性を讃える美談として、今なお繰り返し想起され、語り継がれているのである⁵。

映画『バルトの楽園^{がくえん}』（2006年日本公開）は、そうした板東俘虜収容所の存在をよりポピュラーなものとするうえで重要な役割を果たした⁶。松江役に時代劇『暴れ

ん坊将軍』で有名な松平健を、ドイツ軍青島総督役に映画『ヒトラー ～最期の12日間～』（2005年日本公開）でヒトラー役を好演したブルーノ・ガンツを配した本作は、収容所内における所長と俘虜との国境を越えた友情、そして俘虜と地元住民との心暖まる交流を描いた感動作であり、興行収入12億円を記録するとともに、2006年邦画ランキングでも第24位を獲得した⁷。

しかし意外なことに、本作の冒頭20分間に登場するのは板東ではなく、福岡県の久留米収容所である。そこでは収容所内部の劣悪な環境とともに、板東英二扮する架空の所長・南郷巖による俘虜への見境のない暴力や、脱走し捕縛された俘虜に対する久留米市民の罵倒（「息子ん仇！息子ば返さんか！」と泣きながら罵る女性や「こん人殺しが！死ねや！」と俘虜を足蹴にする男性など）といった、ドイツ人俘虜と日本兵、そして地域住民との対立の様相が描かれる。映画『バルトの楽園』における久留米は、「楽園」である板東と対をなす「地獄」として登場するのである。

また、こうした「地獄」としての久留米俘虜収容所の様相は、単なるフィクショナルな演出ではなく、当時の俘虜や各収容所を査察した欧米人たちの実際の証言、そしてドイツ兵俘虜収容所に関する国内外の諸研究にもとづいたものである。例えばスタンダードワークである富田氏の著書も、ドイツで1963年に刊行された俘虜郵便に関するハンドブック⁸を引用する形で次のように結ばれている。「かつての俘虜たちは、徳島収容所を『模範収容所板東（Musterlager Bando）』と呼ぶのにたいして、久留米については『今日なお怒りをこめて日本の強制収

* 今井宏昌 本レポートは森丈夫准教授の指導のもと、「近代地域社会史研究」の一環として今井宏昌（福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程前期）がまとめたものである。

¹ 富田弘『板東俘虜収容所：日独戦争と在日ドイツ俘虜』法政大学出版局、1991年。

² 『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』創刊号～第8号、2003-2010年。

³ 『ディ・バラック：板東俘虜収容所新聞』（鳴門市ドイツ館史料研究会訳）第1巻～第4巻、1998-2007年；『『トクシマ・アンツァイガー（徳島新報）』紹介』（『徳島新報』翻訳・刊行会編）2005年。

⁴ シンポジウムの詳細と当日の様子に関しては、ゲルマニストでありチンタオ・ドイツ兵俘虜研究会会員の小阪清行氏のホームページ（URL：http://koki.o.o7.jp/okayama_sympo.htm、2011年3月31日閲覧）を参照。なお、筆者は当時まだ学部4回生であり、シンポジウムへの参加はおろか、その存在さえ知らなかった。

⁵ 松江中佐については、多数の関連書籍がある。横田新『松江豊寿：板東俘虜収容所長』歴史春秋出版、1993年；星亮一『松江豊寿と会津武士道：板東俘虜収容所物語』KKベストセラーズ、2006年；田村一郎『板東俘虜収容所の全貌：所長松江豊寿のめざしたもの』朝北社、2010年。

⁶ タイトルの「バルト」はドイツ語で「髭（Bart）」を意味し、当時ドイツ風のカイザー髭を生やしていた松江所長のことを指している。

⁷ 一般社団法人日本映画製作者連盟発表の日本映画産業統計のデータ（URL：<http://www.eiren.org/toukei/2006.html>、2011年3月31日閲覧）にもとづく。

⁸ H. Rüfer / W. Rungas: Handbuch der Kriegsgefangenenpost Tsingtau, unter Berücksichtigung der gesamten asiatischen Gefangenenpost des 1. Weltkrieges, Düsseldorf 1964. 残念ながら今回は入手できなかった。

容所 (japanisches KZ)』と名づけている」⁹。

とはいえ、久留米俘虜収容所に関する自治体報告書の執筆者のひとりである岸本肇氏が述べているように、われわれは「板東収容所を基準にして、久留米収容所を「悪者」のように見做すことには慎重でなくてはならない」。なぜなら、久留米収容所の開設期間が1914年10月6日から1920年3月12日までの約5年半なのに対し、板東収容所のそれは1917年4月9日から1920年4月1日と、その約半分ほどしかなく、さらにいえば「板東収容所が設置されていたのは、ドイツ兵抑留の全期間5年有余の後半2年半ほどであり、特に1918年11月の休戦協定以後は、徐々に解放近しの雰囲気となり、どこかの収容所でも捕虜兵の諸活動は大幅に自由になって」いたからである¹⁰。今後の俘虜収容所研究のさらなる発展を望むとすれば、この指摘を真摯に受け止め、久留米収容所を一度板東との比較から切り離し、その実態をより長期的な視点で捉える必要があるだろう。

久留米収容所そのものに関する先行研究としては、その成立から解体までのアウトラインを描いた坂本夏男氏の先駆的業績¹¹のほか、久留米市教育委員会編纂の報告書¹²があり、また収容所内で展開された俘虜たちのスポーツ活動や芸術活動に関して、山田理恵氏や津村正樹氏、そして松尾展成氏らの個別研究がある¹³。

これらの研究を踏まえうえて本稿が重視するのは、第一次世界大戦という当時の状況と、久留米という地域の問題である。もともと久留米は、日独青島戦争において日本側の主力部隊となった第一八師団の本拠地であり、いわば青島戦の最前線基地であった。本稿が焦点を当てるのは、そうした特質をもつ久留米という地域のなかで、史上初の総力戦と言われる第一次世界大戦下に、「日本のKZ」と呼ばれた収容所が果たしてどのように生み出されていったのか、そしてそのプロセスと構造を当時のドイツ兵俘虜たちがどのようにとらえていたのかという問題である。ここでは近年急速に進みつつある第一次世界大戦研究や軍事史研究の最新の成果に依拠し、また近年日本に紹介された俘虜の回想録を踏まえながら、収容所の成立から解体までの構造的変化を追うことを課

題としたい。

第1章 日独戦争と九州・久留米

日本の第一次世界大戦参加に関するこれまでの一般的な理解は、日本政府が1914年7月28日の開戦を「大正新時代の天佑」(元老・井上馨)とみなし、これに参戦したというものである。しかし山室信一氏に代表される近年の研究では、外相加藤高明が日英同盟を口実として、拙速に参戦へともちこんだことが明らかになっている¹⁴。その際、日本側の参戦の動機は、戦勝による東アジアからの軍事的脅威と経済的障害の排除であり、つまりは中国権益の拡大にあった。この背景には、当時高まりつつあった対米脅威論とともに、欧州での戦争が短期決戦に終わるだろうから先手を打つべきである、といった楽観的見通しがあった。

こうしたなか、一部の政治家と軍人の意思決定にもとづく形で、1914年8月23日、日独戦争が勃発した。議会や国民の意思を無視する形で始まったこの戦争はしかし、そうであるがゆえに、積極的動機づけによる戦意高揚の必要性を生じさせた。例えば1914(大正3)年8月17日付の『時事新報』では、「恨みこもる膠州湾」というフレーズとともに、日清戦争後の独仏露三国干渉の記憶の喚起されることとなった。

この強要「三国干渉—今井」に接するや、吾が日本政府及び国民は痛憤激怒、直ちにこれを排撃せずんばやまざるの意気を示したりといえども、悲しむべし、当時吾が日本は戦い既に疲れ、到底世界の大強国たる独、露、仏の三国を敵として相争うの暇なかりしを以って、ついに忘れもやらぬ五月五日、日本国政府は悲憤の血涙を振って三国政府に向かい、半島の放棄を宣言するのやむなきに立ち至りたるは、今なお吾が国民の記憶に新たなる所なり。〔中略〕独逸の恐るべき禍心は疾風迅雷、耳を蔽うの暇なく、東洋の平和なる地上に勃然としてその鋒鋦を現したり。

⁹ 富田『板東俘虜収容所』305頁。

¹⁰ 岸本肇「ドイツ軍捕虜兵のスポーツ活動と久留米俘虜収容所」『ドイツ兵捕虜とスポーツ：久留米俘虜収容所 Ⅲ』(久留米市文化財調査報告書；第213集) 2005年、18頁。

¹¹ 坂本夏男「久留米俘虜収容所の側面：俘虜の収容、管理及び解放を中心として(上)(下)」『久留米工業高等専門学校研究報告』第31号、1-8頁；第32号、1-5頁、1979年。

¹² 『久留米俘虜収容所 1914～1920』(久留米市文化財調査報告書；第153集) 1999年；『ドイツ軍兵士と久留米：久留米俘虜収容所 Ⅱ』(久留米市文化財調査報告書；第195集) 2003年；『ドイツ兵捕虜とスポーツ：久留米俘虜収容所 Ⅲ』(久留米市文化財調査報告書；第213集) 2005年；『ドイツ兵捕虜と収容生活：久留米俘虜収容所 Ⅳ』(久留米市文化財調査報告書；第251集) 2007年。

¹³ 山田理恵『俘虜生活とスポーツ：第一次大戦下の日本におけるドイツ兵俘虜の場合』不昧堂出版、1998年；津村正樹「久留米俘虜収容所における演劇活動(1)」『言語文化論究(九州大学)』第12号、2000年、35-48頁；松尾展成「久留米『収容所楽団』指揮者オットー・レーマンの生涯と音楽活動」同『日本＝ザクセン文化交流史研究』大学教育出版、2005年、149-226頁。

¹⁴ 山室信一『複合戦争と総力戦の断層：日本にとっての第一次世界大戦』人文書院、2011年。

林美和氏の指摘するように、陸軍もまた、日独戦争がドイツに対する「復讐戦争」であるとのプロパガンダを展開した¹⁵。例えば久留米独立第一八師団佐賀歩兵第五五連隊長であった長堀均大佐は、1914（大正3）年8月23日付の『佐賀新聞』において、「今回の戦闘たるや日清日露の戦役と同一視〔ママー林〕可からず。彼の三国干渉以来廿有余年間臥寝〔ママー林〕嘗胆夢寐の裡にも雪辱の念燃ゆるが如く、只管其時期到来を待ち居りし風雲に会したるもの」といった抱負を述べている。三国干渉以来20年間抱き続けた「雪辱の念」を晴らすという一軍人の決意は、多くの将兵を日独戦争の戦場たる青島へと送り出した地元九州の人々の心に、果たしてどのように届いたのであろうか。

1897年以降、第四八連隊や第二四旅団の司令部が置かれ、また日露戦争時には第四八連隊を満洲へと送り出し、その後1905年4月から1906年2月までロシア兵俘虜収容が設置された久留米は、まさに軍都と呼ぶにふさわしい地であり¹⁶、今回の日独戦争に際しても、神尾光臣中将を指揮官とする第一八師団が久留米から出征した。このとき、同師団には久留米の歩兵第二四旅団第四八連隊、第五六連隊のほか、長崎県大村の歩兵第二三旅団第四六連隊、佐賀の第五五連隊が合流していた。兵士の多くは九州各県の出身であり、兵役志願者のほとんどは農村出身者からなっていた。彼らにとって兵役は社会的上昇のための手段であり、また兵士とは地域社会の期待を担う憧れの職業でもあった¹⁷。

片山杜秀氏によれば、青島戦は砲撃戦でほぼ決着のついた、まさに「近代戦の見本」であり、それは指揮官である神尾中将の経験によるところが大きかった¹⁸。彼は日露戦争時に旅順包囲戦を指揮した乃木希典大将の部下であり、かつての上官の精神主義的な歩兵突撃戦術が日本陸軍に多大な人的損害をもたらしたことを反省し、砲撃を中心とした攻略作戦を展開したのである。それゆえ日本軍の戦死者は1,014名ほどにとどまった¹⁹。

とはいえ、その多くが九州出身者や久留米居住者だったであろうことは想像に難くない。実際、青島戦中の『福岡日日新聞』では、「壮烈なる死」や「名誉の負傷」を遂げた地元出身の「勇士」たちに関する報道が連日にわたってなされた。しかしながらそこでの記事は、ドイツへの憎悪を煽るというより、むしろ兵士への同情を誘う

内容だった。例えば、1914（大正3）年11月29日付の『福岡日日新聞』に掲載された「総攻撃戦の勇士」平田歩兵上等兵の戦死に関する記事では、その死が「恥しからぬ事」として肯定され、合理化されていた。

青島総攻撃にて名誉の戦死を遂げたる歩兵第四十八連隊第四中隊上等兵平田彌平氏は久留米通町出身なり。家族は実父和作氏及実兄長吉氏夫婦にて、菓子製造業を営み平和なる家庭なり。実父和作氏は語って曰く『彌平が入営する時、私は武門に入る以上之が生き別れとなるかも知れぬ。軍人として必や恥しからぬ事を遂げて呉れと云った事がありますが、彌平は決して私の言った事は忘れずに居て呉れました』云々。

またさらに、内務省が開戦後の1914年9月5日に全国の町村長に向けて発した指示には、ドイツへの憎悪を極力小さなものととどめるという意図が込められていた。加藤陽子氏によると、その内容は「このたび、日本はドイツと戦争することになったが、その目的は「東洋の平和保全」のためなので、ドイツ皇帝やその国民に対して、汚い言葉で罵倒したりしてはならない」というものだった²⁰。つまり、ドイツへの「復讐」を唱える戦意高揚プロパガンダが遂行される一方で、ドイツへの憎悪の暴発に対する安全弁もまた、同時に設けられていたのである。そしてこの安全弁が実際に機能していたことは、当時熊本にいたドイツ人女性の証言からも明らかである²¹。

これらのことを踏まえると、日独青島戦争の最前線基地であった九州・久留米において、息子たちの命を奪ったドイツ兵への憎悪が蓄積していったと考えるのは、少々短絡的な見方だと言わざるを得ない。

第2章 久留米収容所の設立

それでは、このような状況のなかで久留米収容所はどのように設立されたのだろうか。まず契機となったのは、1914年9月28日の日本軍によるドイツ軍前進基地・浮山の占領であった。このときドイツ人将兵計60名を俘虜とした日本軍は、10月6日に久留米の梅林寺と大谷派教務所をそれぞれ将校用と下士官・兵卒用の収容所とし、10月9日には移送可能な俘虜55名を久留米に迎え入れた。

¹⁵ 林美和「第一次世界大戦期における軍隊と地域社会：佐賀歩兵第五五連隊の青島出征を事例に」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』第1号、2007年、61-67頁、ここでは61頁。

¹⁶ 『久留米俘虜収容所 1914～1920』1頁。

¹⁷ 林美和「有事における出征将校・兵士の意識と心理行動：日独青島戦争を事例に」『心の危機と臨床の知』第11号、2010年、79-94頁、ここでは80-81頁。

¹⁸ 片山杜秀「未完のファシズム（4）：物量戦としての青島戦役：神尾將軍と伊勢中佐（2）」『波』第45巻第1号、2011年、66-75頁、ここでは74頁。

¹⁹ 瀬戸武彦『青島（チンタオ）から来た兵士たち：第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社、2006年、72頁。

²⁰ 加藤陽子『戦争の論理：日露戦争から太平洋戦争まで』勁草書房、2005年、80-81頁。

²¹ 『久留米俘虜収容所 II』108頁。

同日付の『福岡日日新聞』には第一八師団の山崎高級副官が登場し、地域住民に対して俘虜を迎えるうえでの注意を次のように喚起している。

国と国とは止むを得ず戦端を開きたるも、個人としては何等怨恨あるにあらず。故に一度武器を捨てて投降したる以上は、敵として見るは甚だ不穏当にて、全く一種の局外中立者と見ざるべからず。[中略] 今回俘虜到着後收容所の周囲に押し寄せ、若くば市中散歩の場合等に物珍らしさに群集して之を見物する如きは、彼等に取ては非常の侮辱と不快とを感ずべきにつき、此際一般に注意し彼等の感情を害うなきを期するは、国家のために大に有利なりと信ず。[中略] 地方人に接触するものなれば、特に以上の注意を希望せざるを得ず。

ここでは、俘虜となった者はもはや敵でなく、さらには見世物でもないという論理が提示されており、俘虜に対する人道的扱いに配慮する軍人の姿を見ることが出来る。勝者の余裕であろうか。

またこのような姿勢は、久留米收容所の初代所長に就任した榎村弘道少佐（任期：1914年10月6日～1915年5月25日）の管理体制に顕著だった。彼は俘虜を力で押さえつけるようなことはせず、その生命の安全を保証するとともに、收容所外への遠足や内部でのスポーツ活動、音楽会の開催を推奨した²²。1914年末にはクリスマスが大々的に祝われ、聖祭歌が合奏されるなかツリーや飛行機、飛行船の模型などが飾り付けられたほか、1915年1月27日にはドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の誕生祭も催された²³。それゆえこの榎村時代においては、收容所に対する俘虜の感想も概して良好であり、当時日本各地の俘虜收容所を慰問に訪れていたアメリカの女性旅行家兼著述家エリザ・R・シドモアの報告にも、「将校、兵卒、負傷兵は、私と自由に話すことを許されたが、彼等は、異口同音に、担当日本将校の礼讓、思遣り及び尽きない親切さに感謝していた」とある²⁴。

しかしこうした收容所の環境は、俘虜の増員によって大きく変化することになる。開設当初55名だった俘虜は、1915年1月末までに536名に増大した²⁵。陸軍省は民間家屋の借用による收容所拡充をはかったものの、警備上

・財政上の問題が浮上したため、急遽国分村の衛戍病院に隣接させる形で新收容所を建設し、そこに各地の俘虜を結集させた。この結果、6月9日には総收容俘虜数が1,319名にまで増加し、久留米收容所は当時の日本において最大の俘虜收容所となった²⁶。

そして当然ながら、收容所の拙速な新設・増設は、その造りを非常に粗雑なものにした。陸軍省『欧受大日記』における1917（大正6）年11月21日付けの記録によれば、敷地内にはバラック16棟と調理場、事務室、風呂がひしめき合っており、肝心のバラックも「粗造ニシテ天上ナク」、「外氣ノ侵入烈シク保温十分ナラス」という有様だった。俘虜のひとりであるオットー・シュテューゲマン予備役伍長も後年、次のように回想している。

バラックは、おそらくしっかりと建てられたものではあろうが、時がたつうちにひどく痛んでいた。隙間風が通り、場所によっては雨漏りもした。[中略] 收容に関する主たる苦情は面積の非常な狭さで、[中略] 体を動かすことのできる余地があまりなかった。歩くことができるのは、一筋の道だけだった²⁷。

このように、当初寺院を拠点とする形で開設され、俘虜たちにも概ね好意的な印象を与えていた久留米收容所は、收容者数の急増にともなう臨時移転とバラック收容所の新設によって、その姿を大きく変えていったのである。

第3章 「日本のKZ」の実相

寺院收容所からバラック收容所への転換後に二代目所長に就任したのは、日露戦争への従軍やドイツ駐在武官といった経験をもち、のちに陸軍皇道派の中核となる真崎甚三郎中佐（任期：1915年5月25日～1916年11月15日）であった。彼は收容所内に厳格な管理体制を敷き、些細な規定違反も問答無用に処罰していた。この結果、榎村時代には4名ほどであった処罰者数も、真崎時代になると132名へと跳ね上がった²⁸。

なかでも1915年10月2日の俘虜逃亡事件に際しては、逃亡した俘虜4名全員が捕縛されたのち、うち3名が収監され、1名が重営倉に送られるという異例の厳罰が下

²² 『久留米俘虜收容所 II』 6-7 頁；『ドイツ兵捕虜と收容生活：久留米俘虜收容所 IV』 3 頁。

²³ 『久留米俘虜收容所 II』 18 頁。

²⁴ E. R. Scidmore, "Japan's platonic war with Germany", *The Outlook*, December 23, 1914, pp. 917-918 [坂本「久留米俘虜收容所の側面（上）」 2-3 頁より引用]。

²⁵ 『時事新報』1915（大正4）年1月30日付。

²⁶ 坂本「久留米俘虜收容所の側面（上）」 4 頁。

²⁷ 井戸慶治「オットー・シュテューゲマン『日本におけるドイツ人戦争捕虜の状態（熊本・久留米）』」「『青島戦ドイツ兵俘虜收容所』研究』第5号、2007年、47-56頁、ここでは49-50頁。

²⁸ 『久留米俘虜收容所 II』 7-8 頁。

されることとなり、これを機に収容所と俘虜との対立はいっそう深まっていった。さらに1915年11月15日には、真崎が俘虜中尉2名を殴打するという暴力事件が起きた。当時アメリカ大使館付きの書記官であり、日本各地の俘虜収容所を査察したサムナー・ウェルズは、1916年3月8日の久留米収容所への査察に際して、この事件に関して俘虜たちに聞き取り調査をおこない、その詳細を次のように報告している。

1915年11月に収容所管理部は各俘虜将校に天皇即位日の贈り物として何個かのリングと一本のビールを提供しました。[中略] 二人の将校がこの贈り物を、数名の他の日本人将校と一緒に座っていた所長の執務室に持って行って、両者の間にある関係を考えると、いかなる贈り物も彼から受け取る訳にはいかないと述べて返しました。すると所長は彼の将校達と共にそのドイツ人将校達に詰め寄り、彼らの顔面を殴打してたたきのめし、彼らが床に横たわっていると、足蹴りをしたと言います。

所長は、この話全体は真実だと認めましたが、あのドイツ人将校達が天皇家に対して何らかの不敬を意図していたと彼は理解したため、自制心を失って述べたような行動に出たのだと弁解しました²⁹。

真崎のこの行為は、1907年10月18日に日本が調印したハーグ陸戦条約（陸戦ノ法規慣例ニ関スル規則）の第2章第4条「俘虜ハ人道ヲ以テ取扱ハルヘシ」を明確に違反しており、その意味で彼は「第2ハーグ条約の精神をほとんど理解していなかった」といえる³⁰。また当時久留米収容所の俘虜であったハインツ・ブーヘンターラー大尉は、真崎の俘虜への高圧的態度に関して次のように回想している。

この所長は中佐で、たいていの所長には言えることだが、参謀本部員であった。彼は、かつて命令によって派遣された先のドイツの軍隊で何年も手厚くもてなされたことがあり、しばしばドイツの事情や考え方についての知識を自慢さえた。それにもかかわらず彼は、[中略] われわれの状況をできるだけ困難なものにしてやろうと努めたのだ。この小さな威張り屋は、ヨーロッパ文化に接した日本人層にありがちな完全な

人種的優越感とうぬぼれに浸っていたのが、ドイツで無意識のうちに一再ならずその虚栄心を傷つけられたのだろうか。そして、身を守るすべのない捕虜たちに八つ当たりして鬱憤を晴らしたわけだ³¹。

ブーヘンターラーが真崎の行為を、人種的コンプレックスから生じた「八つ当たり」として理解している点は興味深い。そもそも日本軍が日独戦争開戦時の戦意高揚に際して持ち出した恥辱の記憶としての独仏露三国干渉も、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の唱えた人種主義的な「黄禍論」にもとづくものであった。飯倉章氏は、当時の日本の知識人やエリート層のあいだに、この「黄禍論」への反発として排西欧的ナショナリズムとアジア主義、そして「白禍論」が広まっていったことを指摘しているが³²、のちに陸軍皇道派の首魁となる真崎に同様の思想が根付いていたであろうことは想像に難くない。

とはいえ、真崎時代の久留米収容所における俘虜への暴行は、何も所長である真崎だけが行使したものではなかった。収容所内では真崎が俘虜将校殴打に関して陸軍省から嚴重注意を受けたのちも、衛兵が「侮辱」を理由に俘虜を殴打するという事件が発生していた³³。この点に関しても、俘虜将校ブーヘンターラーは鋭い分析をおこなっている。

われわれの兵たちは、歩哨や監視兵によって計画的に、ほんのちょっとしたきっかけで、しばしば何の理由もないか、ひょっとすると言われたことがわからないというだけのことも多かったが、拳や小銃の床尾で殴られ、足蹴にされたのである。われわれの観察によれば、日本の陸軍では兵卒は上官に虐待されることがまれではない。したがって、捕虜に対してなぜもっと穏やかな面を見せる必要があるのか、ということになる³⁴。

実際、青島に出征した日本軍内部においても、部隊の規律の乱れを整え、兵士を服従させるための手段として、将校による鉄拳制裁がおこなわれることは日常茶飯事であった³⁵。久留米収容所が青島戦で主力を担った第一八師団の本拠地であったことも合わせて考えると、こうした日本軍内部の暴力性がそのまま収容所のなかに伝播・浸透していき、暴力的な管理体制を出現させる一要因と

²⁹ 高橋輝和「サムナー・ウェルズによるドイツ兵収容所調査報告書」『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』創刊号（改訂版）、2003年、1-31頁、ここでは11頁。

³⁰ 高橋輝和「丸亀俘虜収容所のランツェレ大尉事件と第2ハーグ条約（2）：人間共生の一特例としての捕虜処遇法」『文化共生研究』第4号、2006年、101-116頁、ここでは108頁。

³¹ 井戸慶治「久留米俘虜収容所に関するブーヘンターラーの報告（翻訳と注解）」『言語文化論究（徳島大学）』第15号、2007年、35-99頁、49頁。

³² 飯倉章『イエロー・ペリルの神話：帝国日本と「黄禍」の逆説』彩流社、2004年。

³³ 『ドイツ軍兵士と久留米：久留米俘虜収容所Ⅱ』9頁。

³⁴ 井戸「久留米俘虜収容所に関するブーヘンターラーの報告」63頁。

³⁵ 林「有事における出征将校・兵士の意識と心理行動」86-87頁。

なっていたことは否定できない。

さらに真崎時代の久留米収容所には、俘虜と所長・衛兵との対立だけではなく、俘虜内部の軋轢も絶えなかった。例えばポーランド系俘虜であるタデウス・ヘルトレとテオフィール・ワルセウスキーは他の俘虜から民族差別虐待を受けており、この事態を重く受け止めた陸軍省は、彼らを香川県の丸亀収容所へと移送した³⁶。それは本国ドイツにおける民族問題が暴力的な形で表出した結果であった。

1915年末から1916年初めにかけて、久留米収容所は設立以来二度目のクリスマスとドイツ皇帝誕生日を迎えた。しかし前回の華々しい祝賀は見の影もなく、そこではもはや祈祷以外の一切の催しや余興が禁じられたのだった³⁷。

第4章 環境改善と地域社会との交流

真崎の転属にともない三代目所長に就任したのは、彼と同じく日露戦争への従軍とドイツ駐在武官の経験を持ち、のちに首相にまで昇りつめた林銑十郎中佐（任期：1916年11月15日～1918年7月24日）であった。林は基本的に真崎体制を継承したため、収容所内の対立と不信感が所長の交代によって解消されることはなかった。処罰者数も1917年の一年間だけで193名にのぼり、1916年12月7日に第二次査察に訪れたウェルズも、俘虜の待遇改善がみられないとの判断を下した³⁸。

しかし林時代も後半に入ると、俘虜の待遇は改善の兆しを見せ始める。例えば1917年10月14日から21日にかけては「第一回スポーツ週間」と題するスポーツ大会が開催され³⁹、また1917年11月9日から1918年3月下旬にかけては収容所近くに位置する山砲隊敷地の拡張工事において俘虜が雇用された⁴⁰。またこのほかにも、物価高騰と予算不足による食事情の逼迫のため、隣接する田畑における野菜の栽培が許可されたり、あるいは福島町（現在の八女市）や柳川といった遠方への遠足がおこなわれたりした⁴¹。俘虜たちもこの傾向を往々にして歓迎していたようであり、俘虜将校シュテューゲマンも次のように回顧している。

労働を強制されたのは一冬だけで、兵営広場の整地のためだった。報酬として兵卒は一日5銭、下士官は7銭もらった。そのための労働班が毎日出頭しなければならなかったが、日曜日と日本の祭日は休みだった。とにかく多くの人が喜んで出かけて行ったが、それは時折収容所の外に出て、十分に体を動かすためであった。[中略] さらに1918年から畑が借り上げられ、希望者によって耕されたが、これは好評だった⁴²。

こうしたなかで所長と俘虜との心理的な溝はしかし、依然として埋まらなかったようである。シュテューゲマンによれば、「最初の二人の所長（大佐か中佐）[シュテューゲマンは1915年6月に熊本から久留米に移ったので、ここでは真崎と林を指す—今井]は、全然好かれなかった」⁴³。

所長と俘虜との対立、そして収容所内の諸問題が一気に緩和・解消されたのは、四代目所長である高島巳作中佐（任期：1918年7月24日～9月7日）と五代目所長である渡辺保治大佐（1918年9月7日～1920年3月12日）の時代であった。この時期になると俘虜の他の収容所への大規模移送によって過密状態が緩和され、またスポーツ環境が改善されるとともに、所内のスポーツ情報誌『トゥルネンとスポーツ』も発刊された⁴⁴。所長二人への評価も真崎や林へのそれに対して比較的良好だったようで、シュテューゲマンも「三人目[高島を指す—今井]はわれわれに好意を示した（彼はあまりにも早くシベリアに行き、そこでロシア人からある収容所にいたドイツ人たちを引き取った。彼らにとってこれは大きな恵みであった）。四人目[渡辺を指す—今井]はむしろ無関心だった」と回顧している⁴⁵。

1918年9月16日以降になると、地元の工場や会社で俘虜たちが働くという光景もみられるようになった。彼らは製粉や菓子製造、織物機械、木綿漂白、鋳型、蒸気機関といった分野で活躍し、なかには収容所からの解放後も九州に残り、地元の工場や会社に勤め続けた者もいた⁴⁶。特に、つちや足袋合名会社（現ムーンスター）で働いたハインリヒ・ヴェデキントと日本足袋（現ブリヂストン）で働いたパウル・ヒルシュベルガーは、ともに久留米の基幹産業であるゴム産業の発展に多大なる貢献

³⁶ 『久留米俘虜収容所 Ⅱ』12頁；高橋輝和「丸亀・板東俘虜収容所の特殊俘虜」『文化共生学研究』第6号、2008年、107-124頁。

³⁷ 『久留米俘虜収容所 Ⅱ』18頁。

³⁸ 同上、10頁。

³⁹ 同上、91-92頁。この詳細については、山田『俘虜生活とスポーツ』および『久留米俘虜収容所 Ⅲ』を参照。

⁴⁰ 『久留米俘虜収容所 Ⅱ』23頁。

⁴¹ 『久留米俘虜収容所 Ⅳ』6頁。

⁴² 井戸「オットー・シュテューゲマン」50-51頁。

⁴³ 同上、52頁。

⁴⁴ 『久留米俘虜収容所 Ⅳ』4頁。

⁴⁵ 井戸「オットー・シュテューゲマン」52頁。

⁴⁶ 『久留米俘虜収容所 Ⅱ』24-25頁。

を果たした人物である⁴⁷。

また収容所内において活性化した文化・スポーツ活動も、俘虜と地域社会との重要な接点となった。例えば第一次世界大戦終結後の1918年11月29日から12月5日には、収容所内のバラックで「第三回久留米美術工芸品展覧会」が開催され、俘虜たちもその準備・運営に携わった。出品物は彼らの作成した絵画や彫刻、玩具などで、演劇、音楽会、運動競技などの催しも同時開催された。観覧者は当初、軍人や役人、在地の有力者などに限定されていたが、最終日には地元の中学生たちも招かれた⁴⁸。さらに1919年12月19日から21日には俘虜帰国間近を記念し、市内の劇場・恵比寿座を利用した「独逸人演芸会」が市役所、市教育会、愛国婦人会によって開催された。こちらも観覧者は有識階級や同好者からなる一部の人間に限定されていたものの、「開幕間際には既に満員」だったという⁴⁹。

それでは、俘虜たちはこうした交流を経るなかで、地域社会や地元住民に対していかなる感情を抱いたのであろうか。久留米収容所設立当時から同収容所の俘虜であったエルンスト・クルーゲ上等兵は、もともと九州が「まだほとんど中世のような暮らしをしている」「かなり未開の田舎」であり、久留米市民に対しても「従順」で「大人しい」と感じていた⁵⁰。ここからは、クルーゲが九州・久留米の地域社会や地元住民らをオリエンタリズム的なまなざしをもって見つめていたことこそうかがえるものの、彼らに敵意や憎悪を抱いていたとは考えられない。むしろクルーゲは、その後久留米市民との交流を深めるなかで、彼らに親しみを抱いていくこととなる。収容所からの解放が間近に迫った1919年12月3日、クルーゲは久留米高等女学校（現在の福岡県立明善高等学校）で開催された俘虜と生徒との交歓会⁵¹において、他の俘虜らとともに「第九」の第2・第3楽章を演奏した⁵²。彼はそのときのことを次のように振り返っている。

我々はこうした楽しい日々の後、生まれ変わったようになった。[中略] この学校では我々を完璧な好意を持って扱ってくれた。そして日本の一般民間人と接したところはどこでも同じであった⁵³。

以上のように、久留米収容所では1918年11月に第一次世界大戦が終結し、1919年6月28日のヴェルサイユ講和

条約締結によって俘虜たちの解放が確定して以降、ようやく俘虜と地域社会との本格的な交流が始まり、両者の間に好意的感情を芽生えさせていったのだった。1919年12月31日、クルーゲは念願叶い祖国ドイツへの帰還を許された。しかしその帰国シーンは、喜びというよりも一抹の寂しさに彩られている。

突然収容所の中から故郷行進曲のメロディーが鳴り響いた。老ヘルマン氏がお別れにトランペットを吹いてくれたのだ。我々はもちろんすぐ唱和して、喉も張り裂けんばかりに合唱した。[中略] 市内に入ると、市民があちこちの家から出て来て手を振り「さよなら」と呼びかけたので、我々も答えて手を振った。[中略] 乗車して、荷物を置いて、それから残留者と談笑するために降りた。さあ今度こそお別れだ。言葉を言うのも難しく、涙が溢れる者もいた。喜びで気が狂うに違いないと5年間信じてきたその出発の瞬間が来たのに、それは思ったよりずっと深刻なものであった。別れを告げなくてもよいと思っても、だめだった。多くの苦しみを受けた土地にさえ、心の一部が残るものである⁵⁴。

おわりに

「日本のKZ」とも呼ばれる久留米収容所の劣悪な環境を生み出したもの、それはまさに、第一次世界大戦の長期化と軍隊社会の孕む暴力的矛盾そのものであった。

当初俘虜からも好意的に迎えられていた久留米収容所の環境は、大戦の長期化による拙速な移転・大規模化、そして真崎・林時代の厳罰化路線を経るなかで、著しく劣悪なものへ変質していった。そこでは俘虜たちが収容所の環境に不満を漏らし、それを収容所が暴力をとまなう形で厳しく取り締まり、そのことがさらなる俘虜からの反発を招くという悪循環が起きていた。この背景には、真崎や林といったエリート軍人特有のパーソナリティのほか、軍隊内での「いじめ」や「しごき」といった慣習、そして前線である青島に近く、戦争の帰趨や戦地の状況に左右されやすいという久留米の地域的特性があった。

また久留米収容所では他方、俘虜たちのスポーツ活動や芸術活動が積極的に展開されてもいた。板東俘虜収容所に関する最近の研究は、その内部に19世紀的な結社や

⁴⁷ 同上、144-150頁。

⁴⁸ 同上、94-95頁。

⁴⁹ 同上、97-98；『福岡日日新聞』1919（大正8）年12月21日付。

⁵⁰ 『久留米俘虜収容所Ⅱ』108頁；『久留米俘虜収容所Ⅲ』99頁。

⁵¹ ここでは同校の生徒たちによる雑刀術が俘虜たちの前で披露された（『久留米俘虜収容所Ⅱ』98-99頁）。

⁵² 日本で「第九」の第2・第3楽章が演奏されたのは、この久留米女学校での演奏会が初めてであった（横田庄一郎『第九「初めて」物語』朔北社、2002年、第2章参照）。

⁵³ 『久留米俘虜収容所Ⅲ』99頁。

⁵⁴ 同上、120頁。

協会によって形作られる市民的な「擬似社会」や「共同性文化」の出現を確認しているが⁵⁵、こうした社会や文化は久留米収容所内にも存在していたとみるべきだろう。問題は、それが長らく厳罰や俘虜暴行に象徴される軍隊社会によって抑圧され、うまく機能してなかった点にある。事実、厳罰化路線が緩和され俘虜たちの自由度が高まった末期においては、彼らと久留米市民との間にさまざまな交流の花が咲き乱れたのであった。

ドイツ兵俘虜収容所研究が今後さらなる発展を遂げるためには、久留米収容所を「日本のKZ」というセンセーショナルなフレーズで片付けることなく、その成立プロセスと構造、そして全体像を再度多面的・多角的な視野から検討し、そのうえで板東に代表される他の収容所との比較をおこなっていく必要があるだろう。またさらに言えば、ドイツ兵俘虜収容所を、「日独交流」という枠組でしか捉えない歴史観の限界も大きな問題である。例えば久留米収容所でドイツ兵俘虜から虐待を受けた2名のポーランド系俘虜は、その後丸亀収容所を経て板東収容所に移送されたのちも他の俘虜との軋轢が絶えず、最終的に隔離収容所で俘虜生活を送った⁵⁶。このことは俘虜収容所という19世紀の市民的な「擬似社会」がドイツ本国の民族問題をそのまま抱え込んでしまっていたことの証左であり、「日独交流」史観では究明することのできない重要な事例である。

大津留厚氏が兵庫県「青野原俘虜収容所の世界」の

なかにオーストリア=ハンガリー帝国の抱える民族問題の縮図を見出したように⁵⁷、今後はドイツ兵俘虜収容所を日独両国間の美談で終わらせることなく、日本各地の収容所の特性というローカルな視点と、ヨーロッパの民族問題や階級問題、植民地主義やオリエンタリズムといったグローバルな視点の双方から分析し、比較検討していく作業が求められよう。また、収容所が軍人主体で成り立つ組織である以上、所長や衛兵、そして俘虜たちのパーソナリティや、軍隊そのものが孕む暴力と不平等をも問題として取り入れていく必要があるだろう。ドイツ兵俘虜収容所は、さまざまな研究潮流の結節点となりうる魅力的なテーマであり、可能性の宝庫なのである。

《謝辞》本稿を作成する過程で、第21回西日本ドイツ現代史学会（2011年3月30日～31日、於：九州大学箱崎キャンパス・法学部大会議室）第1日目の〈ミニ・シンポジウム〉「近代アジア地方都市とドイツ—久留米（福岡）と青島（膠州）を事例に一」において、同様のタイトルでの報告をおこなった。このような機会を与えてくださったコーディネーターの熊野直樹先生（九州大学教授）をはじめ、コメンテーターの星乃治彦先生（福岡大学教授）、西貴倫氏（九州大学大学院）、後藤啓倫氏（同）、ならびに貴重なご意見・ご批判をいただいた出席者の方々に深く感謝申し上げたい。

⁵⁵ 宮崎揚弘「第一次世界大戦下の板東俘虜収容所：軍隊と『社会』」阪口修平編『歴史と軍隊：軍事史の新しい地平』創元社、2010年、156-154頁；田中優「共同性文化と板東俘虜収容所のドイツ兵：健康保険組合を中心にして」『鳴門史学』22号、2008年、1-15頁。⁵⁶ 『久留米俘虜収容所Ⅱ』12頁；高橋「丸亀・板東俘虜収容所の特殊俘虜」。

⁵⁶ 『久留米俘虜収容所Ⅱ』12頁；高橋「丸亀・板東俘虜収容所の特殊俘虜」。

⁵⁷ 大津留厚『青野原俘虜収容所の世界：第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』山川出版社、2007年。